

令和3年度普及活動成果集



京築農業の「明日」を創る！



福岡県京築普及指導センター

令和4年3月

はじめに

京築地域の農業者並びに関係機関の皆様には、日頃より普及指導センターの活動にご理解とご協力をいただき、心より感謝を申し上げます。

令和3年は、前年から始まった新型コロナウイルス感染症による影響が長引く中、5月15日からの梅雨入りや8月の豪雨災害といった異常気象もあり、農業者の皆様にとっても厳しい一年でした。

このような中、普及センターでは、『京築農業の「明日」を創る』をスローガンに京築農業の屋台骨となる人づくりや、新規園芸農家の確保と労力支援による産地維持拡大などに取り組みました。

人づくりでは、農業系専門学校への就農相談会参加の働きかけや、関係機関が就農希望者の情報共有できる体制を整備し円滑に就農できる体制を構築した結果、令和3年は5名が就農しました。また、新規園芸農家の確保では、関係機関とともに、2種兼業農家で企業を退職された方を対象にナス、ケイトウといった園芸品目を推進した結果、3年間で延べ100人の方が栽培を始めています。

本成果集では、これらの普及活動成果や管内農業・農村の動き、現地実証・展示ほの結果を掲載しております。ぜひご一読の上、産地振興の参考としていただければ幸いです。

普及指導センターは、今後とも農業・農村の振興のため、地域に出向き皆様と一緒に考え行動してまいります。ご理解ご協力をお願いします。

令和4年3月

行橋農林事務所 京築普及指導センター

センター長 高橋 克典

目次

はじめに	表紙裏
目次	1

1 普及活動の主な成果

新規就農者の確保支援	2
新規園芸農家の確保と労力支援による産地維持拡大	3
需要に応える麦・大豆づくり	4
産地戦略作成と担い手の技術力向上によるレタス産地の強化	5
夏秋なす生産力強化と担い手の確保	6
地域特産果樹による産地活性化支援	7
ホオズキの産地の維持	8
酪農経営の安定化	9

2 管内の動き（トピックス）

	10
--	----

3 普及指導員調査研究結果の概要

	13
--	----

4 現地実証・展示ほ結果の概要

	14
--	----

5 各種表彰の紹介（国、県）

	15
--	----

6 参考資料

(1) 令和3年の気象及び農業生産の概要	16
(2) 現地活動情報一覧	20
(3) 普及指導センターの活動体制	22

1 普及活動の主な成果

新規就農者の確保支援 —京築地域に若い活力の導入を—

■課題化の背景

我が国の農業において、農業者の高齢化による担い手の減少が深刻な問題となっています。京築地域も同様に担い手の不足が問題となる中、産地や農村の維持・発展のため、次世代の担い手となる新規就農者の確保と定着を目的に活動に取り組みました。

■活動内容

1 新規就農者の確保

「就農・就業相談会in京築」を管内関係機関が組織する京築地域農業・農村活性化協議会担い手部会の主催で準備をすすめ、本年は集合形式ではなくコロナ禍に対応した個別相談会として実施しました。

開催にあたって普及指導センターは、農業技術支援センター、農業高校、農業大学校等に赴き周知のための活動を行い参加者の確保に努めました。

2 新規就農者の定着支援

就農後5年以内の新規就農者を対象に営農基礎講座や経営基礎講座及び新規就農者のつどいを開催し、就農後の経営目標達成に向けた支援を行いました。

※新規就農者のつどい……新規就農者とベテラン農業者との研修交流会

■主な成果

1 新規就農者の確保

就農相談会には10名の申し込みがあり、関係機関と共に希望する就農内容等について聞き取りと情報提供を行いました。また、経営計画作成支援や栽培技術指導を行い本年度は9名が新規に就農しました。

2 新規就農者の定着支援

営農基礎講座では農業に必要な基礎的な栽培や制度等の知識習得を、経営基礎講座では複式簿記とパソコン簿記の習得を目指しました。

また、新規就農者のつどいでは指導農業士2名が農業経営の取り組みについて体験談を交えながら講演し新規就農者の意欲向上を図りました。



営農基礎講座



営農基礎講座(剪定)



新規就農者のつどい

■今後の取組み

就農相談会を等の取組みを継続し京築地域の新規就農者を確保を図るとともに経営向上に向けた継続的な支援を行っていきます。

(地域振興課 地域係)

新規園芸農家の確保と労力支援による産地維持拡大

—関係機関と一体となって取り組んだ園芸産地の維持拡大—

■課題化の背景

管内農家の高齢化率は県平均58%と比較して71%と高いため、今後、園芸品目の生産量は急激に縮小していくことが予想されます。このため、第二種兼業農家率が高い地域性に着目し、関係機関と一体となって企業等を退職された第二種兼業農家を対象に、新規園芸作物の作付け推進に取り組みました。

また、労力が不足している園芸農家に対して、労力支援を推進し、園芸産地の維持拡大に取り組みました。

■活動内容

新規園芸農家確保に向けて、市町主催の園芸作物栽培希望者説明会開催を支援しました。当初（平成30年）は、みやこ町のみでの実施でしたが、この事例を参考に推進した結果、現在では4市町（みやこ町、行橋市、吉富町、築上町、上毛町）に拡大しました。新規に園芸栽培を始めた農家には、JA農業塾や生産部会への加入を呼びかけ、技術習得を支援しました。

園芸産地の維持拡大に向けて、ケイトウ、夏秋ナス、キウイフルーツ品種「甘うい」の作付けを推進しました。栽培促進のためのポスターやチラシを作成し、作付け拡大を図りました。さらに、新規品目の生産者には重点的に技術指導を行い、栽培の定着を支援しました。

労力不足対策として、農福連携による労力支援を進め、柿の袋詰めやレタスの補植作業の手順書を作成し、福祉施設と農家のマッチングが円滑に進むよう支援しました。

■主な成果

栽培説明会の開催や、新規就農者、農業塾生などに作付けを呼び掛けた結果、令和3年度までに100名が新規に園芸品目の栽培を開始しました。

また、ケイトウ、夏秋ナス、「甘うい」は関係機関を巻き込んで推進するという機運を醸成しました。その結果、ケイトウと夏秋ナスは県下一の作付け面積となり、「甘うい」の作付け面積も平成29年から2倍以上に増加しました。

労力支援では、農福連携の取り組みを支援するとともに、農家相談から支援機関の紹介までのフローを整理した一覧を作成しました。

■今後の取組み

今後も、園芸作物栽培希望者説明会の開催市町を増やし、新規栽培者への重点支援を行います。また、労力が不足している農家へ、労力支援機関とのマッチングを勧め、園芸産地の維持拡大を進めていきます。

（園芸畜産課 野菜係）



園芸作物希望者説明会（吉富町）
でのケイトウ現地ほ場説明



園芸作物希望者説明会（築上町）
での先輩農家からのアドバイス

需要に応える麦・大豆づくり

■課題化の背景

京築地域の麦類・大豆の平均単収は、県平均と比べ低く、その大きな要因として、播種作業の遅れ、大豆における難防除雑草のまん延等があげられます。また、麦類においては硬質小麦（ミナミノカオリ、ちくしW2号）のタンパク質含有率の確保が課題となっています。

そのため、令和元年度から3年間、麦類及び大豆の収量・品質向上対策を重点的に取り組みました。

■活動内容

1 麦類の収量・品質向上

麦づくりに意欲の高い10組織・経営体に対し、排水対策の徹底、適期播種、適正な肥培管理などを提案し、収量・品質向上の支援をしました。

また、大麦から小麦（ミナミノカオリ）に転換した生産者に対しては、タンパク質含有率確保のため穂揃い期追肥を必ず施用するよう指導しました（図1）。

2 大豆の収量・品質向上

大豆づくりに意欲の高い15組織・経営体に対し、排水対策の徹底、適期播種（7月20日頃まで）、アサガオ類等の難防除雑草対策などを提案し、収量・品質向上の支援をしました。



図1 穂揃い期追肥に関する現地講習会

■主な成果

1 麦類の収量・品質向上

支援した経営体は全て目標収量（180kg/10a）を達成できました。

また、硬質小麦（ミナミノカオリ）の平均収量は345kg/10aで目標の300kgを達成しました。しかし、タンパク質含有率12.0%を達成したのは35%の経営体で、穂揃い期追肥の施用方法等の課題が残りました。

3 大豆の収量・品質向上

適期播種に対する意識が高まり、播種時期が早くなったものの、難防除雑草のまん延等で目標収量120kg/10aを達成したのは3組織でした（図2）。



図2 大豆の生育状況

■今後の取組み

今後も、硬質小麦のタンパク質含有率向上、大豆の適期播種の推進など、麦類・大豆の収量・品質向上の支援を行っていきます。

（地域振興課 水田農業係）

産地戦略作成と担い手の技術力向上によるレタス産地の強化

—産地の維持と担い手の経営安定に向けて—

■課題化の背景

玉レタスは京築地域の主要品目です。しかしJ A福岡京築レタス部会では高齢化が進み、作付面積や出荷量の減少等の課題を抱えています。また、新型コロナウイルスの影響により外食需要が低迷し、契約栽培数量の減少や価格の下落で、経営が非常に厳しい状況となっています。そこで、産地の維持と担い手の経営安定を目的とした活動に取り組みました。

■活動内容

1 レタス部会の方向性の検討

産地維持に向け、令和元年度から産地を担う生産者を中心に意識の共有を図り、産地の方向性を検討しました。

2 個別面談による経営改善

産地を担う生産者を中心に作付け前に個別面談を実施し、昨年度の実績から作付面積や複合品目の検討等を行いました。

3 品質向上支援

優良品種の検討や収穫期予測による安定出荷の支援を行いました。

■主な成果

1 レタス部会の方向性の検討

検討の結果、品質向上が急務であり、部会全体で品質改善に向けた意識を共有するとともに将来に向けて販売方針を変更しました。

2 個別面談による経営改善

生産者ごとの適正な作付面積への改善により管理作業の遅れが軽減し、単収が1,580kg/10aから2,344kg/10a（契約）へ向上しました（図1）。

また、経営安定のための複合品目は現地での実証試験や先進地視察を行い、収益性等について検討しています。

3 品質向上支援

品質向上が期待できる2品種を令和3年度から導入しました。また、収穫予測モデルを作成し、生育状況の情報提供として活用しました。

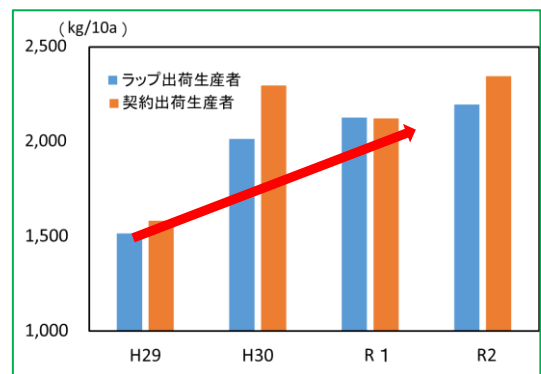


図1 玉レタスの単収の推移



図2 産地戦略検討会の様子

■今後の取組み

普及指導センターでは、今後も産地の維持や担い手の経営安定に向け、継続的な支援を行っていきます。

(園芸畜産課 野菜係)

夏秋なす生産力強化と担い手の確保

■課題化の背景

J A福岡京築夏秋なす部会の課題は、栽培経験年数の浅い生産者の収量が伸び悩んでいることと、収穫調製作業にかかる労力が大きく、戸別作付面積の拡大が難しいことでした。また、部会員の高齢化が進んでいるため、産地規模の縮小が懸念されており、担い手確保も課題でした。これらの課題を解決するため、次の活動を行いました。

■活動内容

1 生産力の強化

なすの栽培期間中は個別巡回指導を行い、栽培技術向上を図りました。また、栽培期間終了後に反省会を開催し、次年度に向けた生産者自身の課題と対策の検討を支援しました。さらに収穫調製作業にかかる労力を削減するパッケージセンターの利用を推進しました。

2 担い手の確保・育成

新規生産者募集説明会を関係機関と連携して実施し、新規生産者の確保に努めました。またJ Aと連携し、新規生産者向けの講習会と新規生産者同士のほ場互評会を開催し、栽培技術の早期習得を図りました。

■主な成果

1 生産力の強化

夏秋なす部会の作付面積が167a (H30) から212a (R3) に増加し、県内一の産地となりました。また、パッケージセンター等の利用推進を図ることで、5a以上の中規模生産者戸数が15戸 (H30) から20戸 (R3) に増加しました。

2 担い手の確保・育成

平成30年から令和3年までに24名の生産者が新たになすを作付けました。また、栽培経験3年以下の新規生産者(担い手)を重点支援することで、担い手生産者の10a当たりの平均単収が4,000kg (H30) から5,800kg (R3) に増加しました。さらに、新規生産者講習会とほ場互評会の実施により、生産者自身が現状を把握することで、生産意欲向上につながりました。



新規生産者講習会



ほ場互評会

■今後の取組み

地区別講習会や個別巡回指導を継続して実施し、栽培技術向上に努めます。

(園芸畜産課 野菜係)

地域特産果樹による産地活性化支援

—京築地域の特長を活かす—

■課題化の背景

京築地域の特産果樹であるキウイフルーツ「甘うい」、伝統のある渋柿「川底柿」およびイチジクの3品目はそれぞれ栽培上の課題を抱えています。「甘うい」は単収が少なく、大玉化率、果実糖度の向上、「川底柿」は名産である干し柿の秀品率および加工量の低下、イチジクは樹勢低下がおもな課題となっています。これらの課題解決を目指し、次の活動を行いました。

■活動内容

- 1 「甘うい」の収量・品質向上
肥培管理と排水対策技術の試験を行いました(図1)。
- 2 「川底柿」の干し柿収量・品質向上
病害虫対策および干し柿の品質向上試験を行いました。
- 3 イチジク樹勢強化対策
樹勢低下の要因解析と、各要因に応じた樹勢回復マニュアルを作成しました。



図1 「甘うい」高畝試験の根域調査

■主な成果

- 1 「甘うい」収量・品質向上
肥培管理試験の結果、根域への追肥量を増やすことで果実を大玉化し、高畝化により根張りを促し、樹体の生育が旺盛になることを実証しました。
- 2 「川底柿」の干し柿収量・品質向上
干し柿の加工量は20kg (H30) →100kg (R2)、干し柿秀品率は15% (H30) →70% (R2) に向上しました。
- 3 イチジクの樹勢低下要因解析の結果をもとに、各要因に応じた樹勢回復マニュアルを作成し、説明会を実施しました。これにより、80%以上の生産者が樹勢改善に取り組みました。

■今後の取組み

管内の「甘うい」は若い樹も多く、これから成園化する園地が広がっていきます。今回の実証結果をもとに、より大玉で高糖度な「甘うい」の生産支援を行います。

人気の高い「川底柿」の干し柿は、より高品質に、よりたくさん製造できる体制づくりを支援していきます。

イチジクについては、作成した樹勢回復マニュアルをもとに安定生産に向けた支援を行っていきます。

【主な症状・影響の中心】	【主要原因別対策】	【写真例(抜粋)】
【樹体】 樹勢の衰え、葉の黄化、果実の減少、根の枯死	●肥培管理 ●水管理 ●排水対策 ●病害虫対策 ●樹体管理 ●土壌改良 ●剪定	●葉の黄化 ●根の枯死 ●果実の減少 ●樹勢の衰え
【土壌】 土壌の乾燥、土壌の酸性化、土壌の塩化	●水管理 ●排水対策 ●土壌改良 ●剪定	●土壌の乾燥 ●土壌の酸性化 ●土壌の塩化
【気象】 台風、豪雨、干ばつ	●水管理 ●排水対策 ●土壌改良 ●剪定	●土壌の乾燥 ●土壌の酸性化 ●土壌の塩化
【病害虫】 根腐病、根癌病、根結核病	●排水対策 ●土壌改良 ●剪定	●根腐病 ●根癌病 ●根結核病
【その他】 樹体の損傷、樹体の衰弱	●水管理 ●排水対策 ●土壌改良 ●剪定	●樹体の損傷 ●樹体の衰弱

イチジク樹勢低下要因早見表

(園芸畜産課 果樹係)

ホオズキの産地の維持

■課題化の背景

京築地域は、生産量、品質ともに県内一のホオズキ産地です。しかし、高齢化や病害発生等の影響で出荷量は年々減少傾向にあり、産地規模の維持が急務です。

ホオズキの重点防除病害は、白絹病と斑点性病害です。白絹病は土壌消毒技術が普及し、発生が減少しています。一方、斑点性病害は多発しており、その原因の一つであるタバコ微斑モザイクウイルス（以下 TMGMV）への感染が、京築管内のホオズキでも確認されました。このため、普及指導センターとJA福岡京築では、TMGMV抵抗性苗の育成試験に取り組みました。

また、普及指導センターでは、苗調整や芽出し作業等の労力を軽減できる、挿し芽苗を用いたホオズキ栽培試験を昨年から実施しています。さらに当栽培法は、ほ場占有期間が4月～8月と慣行栽培より3か月程度短く、雨よけハウスでの冬春作物と組み合わせた経営が可能となります。そこで、本年、雨よけハウスでの挿し芽苗栽培の適応性について実証しました。

■活動内容

1 TMGMV抵抗性苗の育成試験

国立研究開発機構農業・食品産業技術総合研究機構より提供されたTMGMV弱毒株粗汁液（以下ワクチン）を、同機構より示された「マルチワクチンを核としたホオズキのウイルス病防除マニュアル」の手順により接種し、親株の育成を図りました。

2 施設栽培での挿し芽苗栽培の適応性の実証

雨よけ施設での挿し芽苗栽培展示ほを1か所設置し、技術の実証に取り組みました。施設挿し芽苗栽培と慣行の露地 地下茎栽培の生育、切り花品質を比較検討しました。



図1 実生苗にワクチンを接種

■主な成果

1 TMGMV抵抗性苗の育成試験

種子から育成したホオズキ幼苗へ、9月中旬にワクチン接種を行いました（図1）。当該種苗を10月上旬に農家育苗ほ場に定植し、弱毒ウイルス感染親株を育成しました。令和4年度に、感染親株から採取した地下茎を生産ほ場に定植し、試験効果を検証します。

2 施設栽培での挿し芽苗栽培の適応性の実証

施設挿し芽栽培では病害の発生が少なく、切花長も十分確保され、着色も良好となることが実証されました。しかし、実飛び等の発生が多く、育苗技術改善や施設管理が課題となりました（図2）。



図2 収穫時写真 左：施設挿し芽苗 右：地下茎苗

（園芸畜産課 花き畜産係）

■今後の取組み

今後、新しい生産技術の確立や病虫害防除対策を徹底することで、病害が発生しやすい平坦地も含めた作付けを推進し、京築地域の特産花きとして産地維持を図っていきます。

酪農経営の安定化

課題化の背景

京築地域において、酪農は畜産経営体の半数を占める畜産振興上重要な部門です。経営体ごとの中長期的な経営計画に沿った継続的な支援が必要です。具体的には、周産期（分娩前後）対策、繁殖対策、暑熱対策を推進し、疾病廃用牛の減少と生乳生産量の増加を目標とした支援活動を、ふくおか県酪農業協同組合および県関係機関と共に行うことが求められています。

活動内容

乳牛で最も重要な時期である周産期をうまく乗り切る支援として、飼料摂取量や太り具合、肝臓負担軽減資材を組み合わせた飼養管理体系の実証試験を行いました。

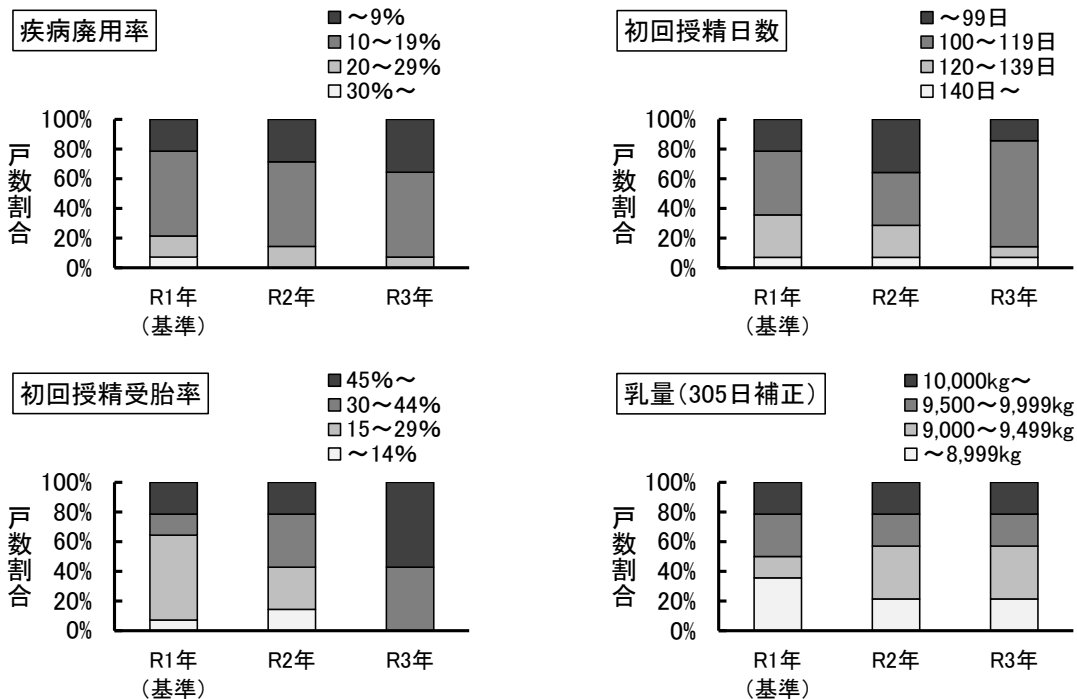
定期的な繁殖検診を行い、問題牛の早期治療や飼養管理方法について酪農家と酪農技術者でディスカッションを行い、成績向上を図りました。

牛舎に設置した大型扇風機のコロリ掃除による風量増効果の測定を行い、暑熱対策啓発に活用しました。

主な成果

最も経営に悪影響を与える疾病による廃用率は改善し、初回授精に要する分娩後日数および受胎率は改善傾向にあります。その結果、牛群の乳量のポテンシャルである305日補正乳量も増加傾向にあります。

※305日補正乳量：産歴、分娩季節、搾乳日数の違う牛の能力を比較評価するために補正した乳量



乳用牛群改良検定成績の推移（各年12月時点での過去約1年間の成績）

今後の取組み

引き続き関係機関と共に、各農家の課題や方向性について把握と共有を進め、有効な改善提案を行い、酪農経営の安定化を図っていきます。

（園芸畜産課 花き畜産係）

2 管内の動き（トピックス）

女性の経営ビジョン作成研修会を開催

女性の経営ビジョン作成研修会を11月15日・24日、12月28日に京築普及指導センター研修室で開催しました。

これは、女性の能力発揮と社会参画に向け、経営ビジョンを持った女性農業者の育成を図ることを目的に行ったもので、延べ7名の女性農業者が研修会を受講しました。当日は、講師の梅山中小企業診断士から、女性視点の将来像の描き方について講演があり、これをテーマに受講生同士で意見交換を行い、今後経営を行う上で必要な課題や課題への取り組み方について検討しました。

受講者からは「自分だけでは気づけなかった課題に気づいた。今後は長期的な視点を持って経営ビジョンの実現に向けて取り組んでいきたい。」という声が挙がりました。普及指導センターでは、地域の女性農業者を今後も継続的に支援していきます。



梅山中小企業診断士による講演



受講者同士の意見交換

吉田牧場が第57回福岡県肉畜共進会国産牛の部で銀賞受賞

令和3年10月に開催された第57回福岡県肉畜共進会（福岡県肉畜共進会主催：農林水産祭参加行事）国産牛の部で、豊前市の吉田牧場（吉田努氏）が銀賞を受賞しました。この共進会は、年に一度、県内の畜産農家が肉畜の肥育技術と改良増殖の成果を競うもので、肉豚の部、和牛の部およびホルスタイン種・交雑種からなる国産牛の部があります。

吉田牧場では、乳用種の発育の良さと和牛の肉質をほどよく備えたハイブリッド牛である交雑種（乳用種♀×和牛♂）を中心に飼育しており、安全・安心・おいしい牛肉づくりに日々取り組んでいます。特に、自家生産したイタリアンライグラス等の牧草や稲ホールクロップサイレージ、地元産の稲わら、県内で発生する食品製造副産物といった地域資源を飼料として有効に活用しており、交雑種の特徴を活かした特色ある牛肉生産を目指しています。



京築管内で初めて本格的に大豆部分浅耕一工程播種を実施

近年京築管内では、播種時期の降雨による作業の遅れ、難防除雑草のまん延、夏季の高温乾燥などにより大豆の収量は低迷しています。

そこで、これらの課題解決のため、福岡県農林業総合試験場が開発した新技術である「部分浅耕一工程播種技術」を今年度から管内で初めて本格的に導入しました。

これは、ロータリーの爪を播種部分だけ短いカルチ爪に交換し、すき床に接するように大豆を播種することで、降雨・乾燥に強くなり、雑草も抑制可能な技術です。加えて事前の耕うんが不要で、降雨後すぐに播種が行えます。

令和3年産大豆では管内の集落営農組織のうち3組織がこの技術に取り組み、計37haを播種しました。営農組織のオペレーターからは、「播種前の耕うん作業が必要無く、降雨の後もすぐにほ場に入れるため、適期播種を行うことができ良かった。」との声があがっていました。

京築普及指導センターでは、大豆の収量向上に向けて今後もこの播種技術の導入推進を行っていきます。



播種部分のみカルチ爪に交換したロータリー

カキ新品種「秋王」、定植後わずか3年で出荷開始！

「桃栗三年柿八年」という言葉のとおり、通常柿は植えると8年程度は実を着けず、収益が上がりません。しかし、普及指導センターが紹介した低樹高ジョイント技術を導入した管内の園地では、苗を植えてわずか3年で収穫を迎えることができました。

低樹高ジョイントは、定植後に隣接樹とつなぎ合わせる栽培技術です。早期に成園化できるだけでなく、横一列で樹高の低い樹形になるため、作業が簡略化できるメリットもあります。



低樹高ジョイントの樹形



生産者同士の意見交換会

2 管内の動き（トピックス）

人手不足の作業に農福連携を活用

普及指導センターでは、人手が不足している農家に対して、NPO法人セルフセンター福岡共同受注窓口（以下セルフセンター福岡）を活用した福祉施設への農作業外部委託、いわゆる農福連携の支援を行いました。

このNPO法人は、複数の障がい福祉施設サービス事業の代表事業所で、農業者から依頼された作業の相談・斡旋・仲介等を無料で行い、作業契約は農業者と障害者施設の間で結びます。

1 果樹の活用事例



管内は渋柿の生産が盛んで、収穫時は渋抜き工程用の網袋にカキを詰める作業を行います。普及指導センターは、渋柿農家から「袋詰め作業の人手が足りずに困っている」との相談を受け、セルフセンター福岡を活用した作業委託を提案しました。農業者の依頼をセルフセンター福岡に紹介するとともに、袋詰め作業の手順書を普及指導センターで作成し、障がい者施設への事前相談や作業への指示を円滑に行えるように工夫しました。農家からは、「作業が遅れずに済み、非常に有り難い」と好評でした。

2 野菜の活用事例

玉レタスは管内の主要品目で、9月から定植が始まり、3月頃まで収穫作業に追われます。普及指導センターは、レタス農家から「新型コロナウイルスの影響で外国人技能実習生が来日できずに困っている」との相談を受け、渋柿と同様に農福連携の取り組みを支援をしました。依頼する作業の選定や作業手順書（今回は補植作業）の作成等を普及指導センターで行いました。農家からは、「補植作業を委託することで他の作業がスムーズにできた」と好評でした。



コーディネーターを介しての
作業委託打合せ

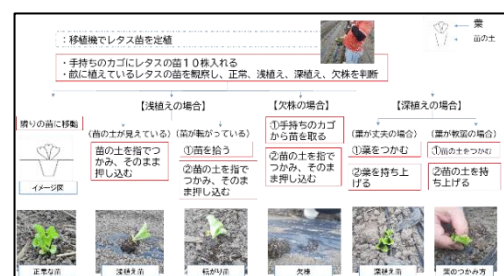


渋柿の袋詰め作業



レタスの補植作業

普及指導センターでは、今後もセルフセンター福岡を活用した農福連携の取り組みを推進していきます。



補植作業の手順書

課題名	結果の概要	部門	担当者
雇用型農業経営で従業員の能力を向上させる手法	雇用型経営において従業員のスキル向上、専門知識向上に向けたOJT研修等を行うことで、実施前と実施後の意識差を調査し、従業員の育成手法を検討した。雇用を導入する経営体の条件整備にもけた指導に活用する。	経営	亀田
経営体支援を円滑に進めるための条件整備	農業者及び普及指導員にアンケート調査により、法人化支援など優先度が高い支援項目が明らかとした。普及指導員は優先度の高い支援項目を早期に習得し、農業者に経営改善の重要性を再認識してもらえるよう条件整備を進める。	経営	安武
女性農業者における経営目標達成の阻害要因について	女性農業者に対する聞き取り調査を実施した結果、女性農業者が設定した目標の実現に向けた課題が明らかとなった。女性農業者に対する支援方策の検討に活用する。	経営	谷口
遊休ハウスにおける所有者の意向把握と有効活用に向けた課題の整理	遊休ハウスの所有者に対するアンケート内容を確立し、リストを作成した。今後、アンケート、リストの活用に向けて改善を重ねる。次年度以降もリストの更新を行い、新規就農・参入者の支援の一助とする。	経営	宇都宮
大豆の収量向上に向けた追肥施用効果の検討	無肥料区に対して、開花期追肥を行った区は莢数が多く、子実重も大きくなったが、大粒割合が低くなった他、屑粒割合も多く収量は低下した。追肥時期の再検討が必要。	水田	道谷
業務用米「やまだわら」の安定生産技術の検討	窒素成分量を増やした方が稈長が高く、穂数が多く、m ² 当たり粒数が増えることが確認できたが、イネカメムシが多発したので、収量向上の効果は判然としなかった。	水田	太田 (吉)
飼料用米「みなちから」と既存品種との収益性及び作業性比較	「みなちから」を6月下旬移植した結果、10月中下旬に収穫することができ、後作の麦作業への影響が少ないことがわかった。しかし、「みなちから」でいもち病が多発したため、収量及び収益性については再検討が必要である。	水田	野見山
雇用型法人における中堅従業員向け「管理作業マニュアル」のモデル作成	水稻・麦・大豆の収量・品質向上に向け、中堅従業員向けの播種・管理作業等に係るマニュアルの作成を実施。説明の様子を動画で撮影することで効率的に作成ができた。	水田	鬼木
直売所出荷実績分析による出荷可能な端境期野菜の選定および選定野菜の栽培実証	直売所出荷実績を分析の上、仕入れが多い品目の中からタマネギを選定し、端境期に出荷の前進化が可能かどうか、トンネル被覆栽培の実証を行った。2月から収穫でき出荷の前進化が可能となった。	野菜	井上 (美)
いちご部会担い手生産者の収量向上に向けた指導方法の検討	今回作成した個別カルテは高収量生産者や他の生産者と比較でき、「数値で示されているので参考になった」等の農家意見が聞かれ、指導手法として有効だと思われる。	野菜	井上 (勝)
遊休樹園地の流動化における樹園地評価基準の活用事例と貢献度把握	樹園地流動化における樹園地評価基準の利用は、利用権設定の賃貸借料を決定する上で、双方の合意が得やすい。今後、評価基準をより実状に合わせる見直しが必要である。	果樹	姫野
キウイフルーツ「甘うい」の高畝栽培における排水性改善効果の検討	「甘うい」において、20cm以上の高畝設置により排水性が改善されたことが示された。併せて、早期落葉等の湿害を軽減することができた。	果樹	山本
ホオズキの挿し芽苗を用いた施設栽培技術の研究	施設挿し芽栽培では病害の発生が少なく、切花長も十分確保され、着色も良好となった。しかし、実飛び等の発生が多く、育苗技術改善や施設管理が課題となった。	花き	兼近
「京築版乳牛周産期管理重点ポイント」の実証	酪農経営の安定のため、周産期管理の重点ポイントを現地酪農家で実施し、周産期疾病対策における飼養管理面でのモニタリング手法と補助資材の利用体系を確立した。	畜産	手島

4 現地実証・展示ほ結果の概要

品目	課題名	結果の概要	設置場所
水稲	水稲種子の品質向上	種子の粒数抑制と充実向上のため、緩効性肥料の割合が多い新規基肥一発肥料について試験した。精粒重は同等だが精粒重歩合が高くなり、粒数抑制と充実向上が認められた。	築上町
水稲	トビイロウンカの防除方法による効果の比較	トビイロウンカ防除で、無人ヘリとドローンで防除効果に差があるか比較した。令和3年産水稲ではウンカ類の飛来及び発生が少なく、防除効果は判然としなかった。	豊前市
大豆	部分浅耕一工程播種の実証	部分浅耕一工程播種は慣行の作業と比べて作業時間の短縮でき、収量は同程度確保することができた。ただし、慣行と違って播種前の非選択性除草剤の散布が必要である。	みやこ町 吉富町
大豆	難防除雑草対策の実証	トレファノサイド乳剤の土壌混和をはじめとした体系防除の試験を行った。試験区でアサガオ類、イネ科雑草の発生が抑えられた。	みやこ町
麦	排水カッターによる収量向上	麦ほ場の排水性改善による収量向上を目指して試験を行った。排水カッターの施工後から収穫まで降雨が少なく乾燥したため、排水カッターによる効果はみとめられなかった。	みやこ町
麦	緩効性追肥による施肥の省力化	硬質小麦栽培の施肥の負担軽減のため、緩効性肥料による穂揃期追肥の省力化試験を行った。収量、タンパク質含有率ともに慣行栽培と同等またはそれ以上の結果となった。	行橋市
レタス	レタスの優良品種選定	近年の暖冬傾向により、収穫適期が短い、ピンクリブ等の生理障害や形状の乱れが発生しているため優良品種の選定を実施した。清水グリーン、TLE-584等が有望だった。	豊前市 上毛町 築上町
ブロッコリー	ブロッコリーの生理障害対策	年内出荷作型におけるホウ素欠乏症対策のため、葉面散布剤の試験を実施した。効果は判然とせず、土壌中にホウ素が十分にあって欠乏症が発生したことから、欠乏症には根の生育が関係していると考えられる。	上毛町 吉富町
スイートコーン	スイートコーンの優良品種選定	6月上旬の作型で優良品種を検討した。「わくわくコーン82」が倒伏しにくく、また副房が少なく粒揃いが良く、有望であった。令和4年度も継続して試験を実施し、産地導入を検討する。	豊前市 上毛町 築上町
夏秋なす	夏秋なすにおける土壌水分推移調査	高収量生産者の土壌水分管理を調査した。その結果、生育ステージに合わせた定期的な土壌水分の確認と適切な量のかん水が収量向上のために必要であることが示唆された。	行橋市
白ネギ	露地新規品目の導入の検討	産地導入するため、は種作業の省力化の検討を行った。その結果、は種板を導入することにより大幅に作業効率が向上した。	築上町
カキ	低樹高ジョイントにおける「秋王」着果安定対策	「秋王」の着果促進技術をワイヤリング区、環状剥皮区、無処理区で比較。環状剥皮区が最も着果率が高いことが明らかとなった。	行橋市
キウイフルーツ	「甘うい」の樹勢強化に向けた追肥量の検討	追肥量を慣行の2倍にすることで新梢伸長量が改善し、継続的に施用することで樹勢強化に繋がる可能性が示唆された。ただし、果肉色への影響は今後検討する必要がある。	行橋市
キウイフルーツ	「甘うい」の時期別果実糖度調査	収穫適期把握に向けた生果糖度の調査適期は9月上旬、中旬、下旬の3回であることが明らかとなった。	行橋市
イチジク	イチジクの樹勢強化に向けた追肥量の検討	芽出し肥の4月追肥に加え、樹勢強化のための5月追肥を検討した。その結果、5月追肥は果実品質を落とすことなく樹勢を強化する方法として有効と考えられた。	行橋市
ケイトウ	ケイトウ品種「有明」の栽植密度の検討	ケイトウ品種「有明」では、200穴セルトレー1穴に4粒播種し、栽植密度が概ね120本/m ² になるよう定植すると、品質が良好となった。	吉富町

5 各種表彰の紹介（国、県）

(敬称略)

表彰事業名・受賞名	受賞者氏名・組織名	市町村名
令和2年度福岡県大豆作経営改善共進会 集団の部 優秀賞	農事組合法人 今井ぎおん営農組合	行橋市
第57回福岡県肉畜共進会 国産牛の部 銀賞	吉田牧場（吉田努氏）	豊前市

※令和3年4月から令和4年2月の期間の表彰事業において表彰を受けた個人及び組織

(1) 令和3年の気象及び農業生産の概要

■気象概況

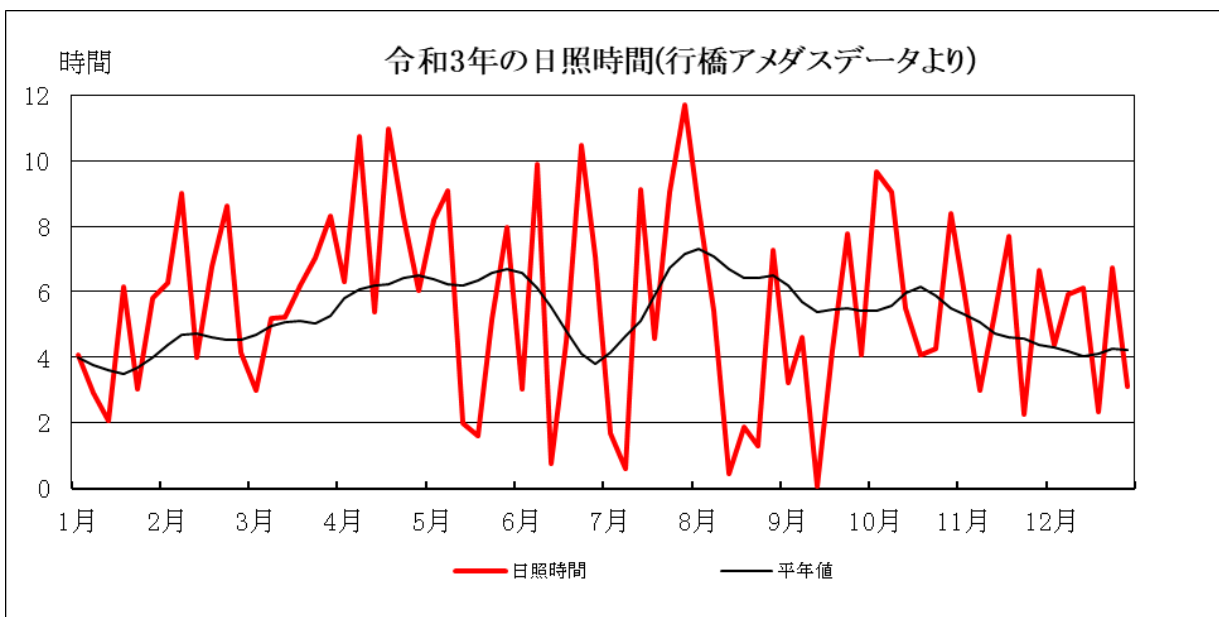
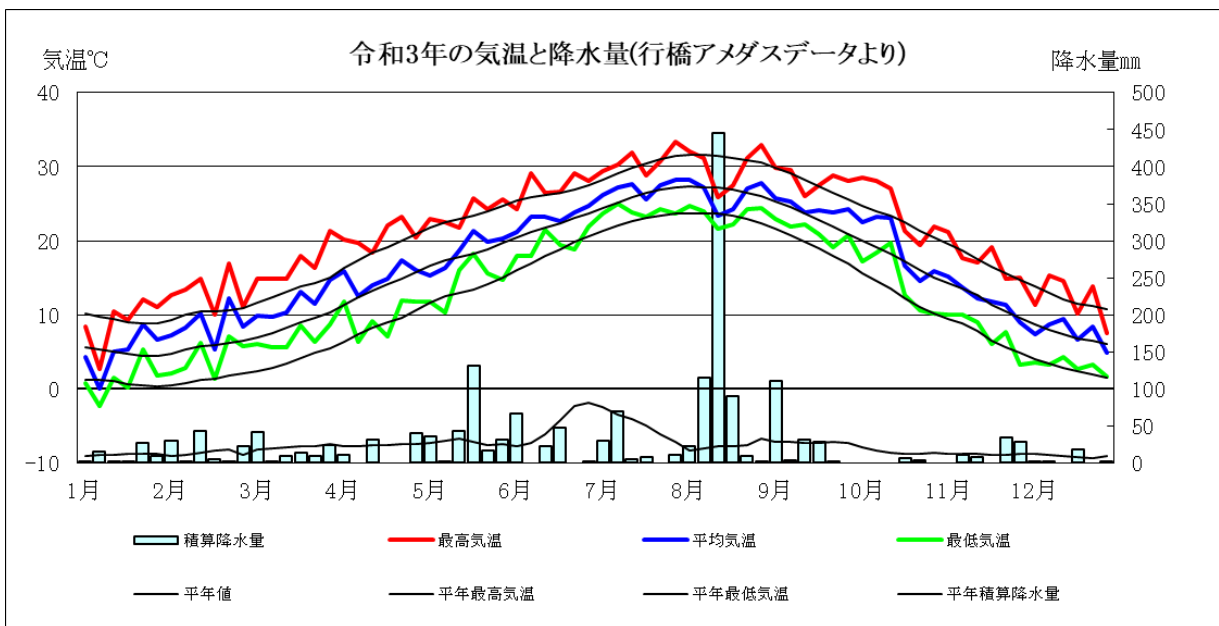
1月上旬に寒波があり積雪したが、その後、3月にかけて気温が高く推移し、降水量は平年並みとなった。4月と5月の気温はやや高くなった。4月は少雨であったが、平年より1カ月程度早い5月15日に梅雨入りしたため、5月の降水量は平年を大きく上回った。

6月と7月の気温は平年よりやや高くなった。6月と7月の降水量は、平年より著しく少なく空梅雨となった。梅雨明けは7月12日で平年よりやや早かった。

8月は台風9号の影響とその後の大雨で、平年の4倍以上の降水量となり、九州各地に豪雨災害をもたらした。気温は平年より低かった。

9月と10月の気温はやや高く推移した。9月中旬から10月上旬にかけては、ほとんど降雨がなく乾燥した。

11月と12月の気温は平年並みで、12月の降水量は著しく少なかった。



■主な品目の生産概要

普通作

○ 水稲

早期水稲の移植は4月12日から始まり、5月4日頃がピークであった。6月以降の高温で生育は早く進んだ。草丈は平年より長く、茎数は平年よりやや少なく、出穂期は平年よりやや早くなった。成熟期は平年並み～やや早かったが、8月の大雨の影響で収穫は遅れた。収量は平年並みで、白未熟粒の発生が少なく品質は良好であった。

普通期水稲の移植は6月6日頃がピークとなり、高温多照で苗の活着は良好であった。7月の高温少雨で生育が早く進み、草丈は平年より長く、茎数は平年並みで、葉色は淡かった。出穂期は平年より2日程度早くなったが、8月の低温多雨で成熟期は平年並みとなった。しかし、出穂期前後の8月上旬に襲来した台風とその後の大雨により籾ずれ、内穎褐変病が多発し、登熟期前半の日照不足で登熟不良となった。収量は平年並み～やや少ない。また元気つくし以降の品種で斑点米が目立ち、品質はかなり低下した。

○ 麦（令和3年産）

播種は令和2年11月初旬から始まり、播種期間の天候が良好であったため全体の約8割のほ場で適期に播種された。大豆後作のほ場では播種が遅れたが、12月末までにはほぼ終了した。1月中旬から3月にかけての高温で生育がかなり進んだ。草丈は平年より長く、茎数は平年並み～やや多く推移し、茎立ち期、出穂期とも平年より1週間～10日程度早くなった。成熟期も平年より1週間程度早く、穂数は平年並み～やや多かった。しかし、収穫時期に断続的な降雨があり、適期収穫ができなかった。収量は前年より多かったが、品質はやや悪く、大麦では裂皮、小麦では穂発芽や退色が見られた。

○ 大豆

今年は梅雨入りが5月15日（平年より21日早い）、梅雨明けは7月13日（平年より6日早い）で、7月は高温少雨であった。6月21日頃から播種作業が始まった。適期の7月20日までに播種できたほ場は全体の63%程度で、7月末に播種はほぼ終了した。7月は少雨でほ場が乾燥し生育量が不足した。8月は大雨でほ場が冠水し一部で生育不良が発生した。主茎長及び着莢位置は昨年より高かったが、莢数はやや少なかった。収穫は10月30日から始まり、11月末時点での収穫割合は75%程度と早く進み、12月中旬までにはほぼ終了した。9月下旬以降の乾燥で子実肥大が阻害され、カメムシ類の被害も多発し、収量は平年より低く、大粒比率及び1等比率も低下した。

野菜

○ イチゴ

令和2年度の1月以降の生育は草勢の急激な変化により、種より果やみぞ果等の奇形果の発生が多かった。令和3年度については、4月以降気温が高く、ランナーの発生は例年よりも早く、多かった。8月中・下旬の長雨の影響により苗の生育が悪く、根傷みや炭そ病が多発したが、JA内で苗供給を調整できた。定植後は、10月の高温と乾燥により、2番果房の分化が遅れた。また、小玉傾向となり12月までの収量は例年より少なかった。

○ レタス

8月中・下旬の長雨の影響により苗の生育が悪く、また9～10月は高温乾燥傾向で推移したことから、一部発芽不良がみられた。定植は、8～9月中旬の降水量が多かったことからほ場準備が遅れ、一部ほ場で定植が遅れた。定植後は9月下旬から10月中旬にかけて降雨が少なかったため、一部の乾燥が激しいほ場では生育が抑制され小玉傾向となったが、かん水を十分に行ったほ場では活着が良好で、9月下旬以降気温が高く推移したため大玉傾向となった。12月以降は日照時間が長かったことから生育が進んだ。

6 参考資料

○ スイートコーン

育苗は、1型では平年に比べ2月の気温が高かったことから、苗の出来上がりは2日程度早くなった。定植は、降雨は平年並みで早めのほ場準備やレタス畝後を利用したことから、全作型で順調に行われた。3月以降、高温乾燥傾向で推移し、一部で副房の発生がみられ、早期作型はやや小ぶり傾向であった。

○ 夏秋なす

4月下旬から定植が始まり、第1果収穫は6月上旬と平年並みであった。梅雨明け後の乾燥により、かん水不足のほ場ではガク割れ果が多発し、8月中下旬の長雨により、多くのほ場で草勢の低下が見られ、うどんこ病と褐色腐敗病が発生した。10月以降は気温が高く推移したことで草勢が回復した。収穫は11月上旬頃まで行われ、収量は前年より増加した。

果樹

○ イチジク

8月中旬～9月上旬の長雨による根傷みやさび病が発生し、早期落葉が目立った。また、この長雨により疫病が多発し、9月以降の高温により、ショウジョウバエが多発した。収量は平年より少なく、収穫ピークの8月下旬に規格外が多く発生した。

○ モモ

生育は平年より早く、8月上旬には収穫が終了した。枯死症が一部で発生したほか、8月後半からの長雨により、根傷みが原因と思われる早期落葉が発生。一部園地ではせん孔細菌病による早期落葉が発生した。糖度は高く、食味は良好で、着色は平年並みであった。

○ キウイフルーツ

8月中旬～9月上旬の長雨により根傷みを生じ、早期落葉と日焼け果が多発した。日焼け果により、貯蔵中の早期軟果が多発した。畝立て、明渠整備等、排水不良を改善した園地では湿害の発生程度を軽減することができた。

○ ナシ

1月の低温により冬季の低温積算が順調に進み、その後の2～3月の高温により、開花期、収穫期は記録的な早さとなった。生育期間の高温乾燥により、糖度は早生品種が高い傾向にあった。8月以降は降雨が続いたため、中生品種以降の糖度、果実重はおおむね平年並であった。

○ ユズ

8月中旬～9月上旬の長雨により黒点病が多発。果実重は概ね平年並であった。

○ カキ

7月上旬および8月中旬以降の長雨・日照不足により、「太秋」、「秋王」において生理落果が発生。一部園地でカキノヘタムシが発生した。着果量は平年よりやや少ないが、全体的に大玉、高糖度で推移した。「秋王」については灰色かび病、傷果により秀品率の低下を招いたが、福岡県内ではトップクラスの秀品率であった。また、「秋王」については低樹高ジョイント栽培の導入により、定植3年目での出荷に成功した。

花き

○ ホオズキ

芽出しは2月下旬から始まり、3月下旬頃には完了、発芽揃いは良好であった。4月上旬から下旬にかけて適度な降雨があり草丈の伸びは良好であった。着色はエスレル散布時期が曇天となり概ね良好であった。本年は、下位節の宿存萼の飛びや奇形が多かったが草丈が確保され、作柄は平年並みとなった。

○ キク

8月出しギクについては、白さび病の発生も少なく順調な生育であった。本年は草丈伸長も良好で、2L率が高くなった。直売所の販売については、盆前の台風9号による降雨が影響し低調となった。

○ ケイトウ

J A共同育苗により良質苗が供給された。8月出しの作型は、5月7日、13日の2回に分けて播種し、約20日間で本葉4枚の定植苗となった。定植は5月下旬より行われ、順調に活着した。本年は生育期の気温が高く推移したことから平年よりも生育が早まり、出荷時期が前進化した。また、大花の発生も多く、その対策が課題となった。

○ シンテツポウユリ

J A共同育苗により良質苗が生産された。定植は4月中旬～下旬の適期に行われたが、5月上旬の気温が低く生育は一時停滞した。本年は生育期間の降雨が少なく、気温は高く推移したことから、全体的に草丈が短く、花蕾数も2輪の割合が多くなった。葉枯れ病の発生は少なかったが、強風の影響で葉傷みが発生し品質が低下した。

畜産

○ 酪農

酪農家戸数が15戸から14戸に減少し、飼養頭数が減少したため、生乳生産量は前年より減少した。

○ 自給飼料

イタリアンライグラス：2月～4月の気温が高く、収量は平年並みであった。収穫時期に好天に恵まれ、品質は良好であった。

WCS用稲：病虫害が少なく十分な収量を得られた。

6 参考資料

(2) 現地活動情報一覧

No.	情報テーマ	作成月日
1	大型扇風機のお掃除で風量アップ	5月19日
2	イチゴの現地育苗管理講習会を開催	5月20日
3	8月出荷用ケイトウの定植が順調に終了	6月11日
4	夏秋なす新規栽培者向け講習会開催	6月14日
5	夏秋なす目合わせ会が開催されました	6月28日
6	新田原果樹部会が担い手講習会を開催	7月6日
7	ブロッコリー作付前講習会が開催されました	7月26日
8	京築特産ホオズキの出荷が最盛期を迎えています	7月29日
9	イチゴ栽培研修会を開催	8月5日
10	新たな技術による大豆適期播種で収量向上！	8月17日
11	京築特産のイチジク、いよいよ出荷開始！	8月17日
12	イチゴ新規栽培勉強会を開催	9月1日
13	川底柿の渋抜き教室	10月12日
14	桃栗三年柿三年！？	10月27日
15	麦の収量・品質向上を目指して！	11月5日
16	京築地区青年・女性農業者等実績発表大会を開催	11月12日
17	経営戦略に活かした雇用の活用について	11月19日
18	築上町新規園芸就農希望者説明会を開催	11月26日
19	最新のスマート農業技術について学ぶ！	11月30日

No.	情報テーマ	作成月日
20	人手不足の渋柿袋詰め作業に救世主！	12月1日
21	夏秋なす新規作付け希望者向け講習会を開催	12月2日
22	ホールクロップサイレージ用稲「つきすずか」の導入	12月3日
23	落葉果樹、せん定シーズンに入りました！	12月6日
24	第2回イチゴ新規栽培勉強会を開催	12月7日
25	上毛町名産の干し柿、いよいよ出荷開始	12月28日
26	女性の経営ビジョン作成研修会を開催	1月18日
27	インボイス制度について学ぶ	2月7日
28	春の訪れ、新たまねぎ出荷開始！	2月10日

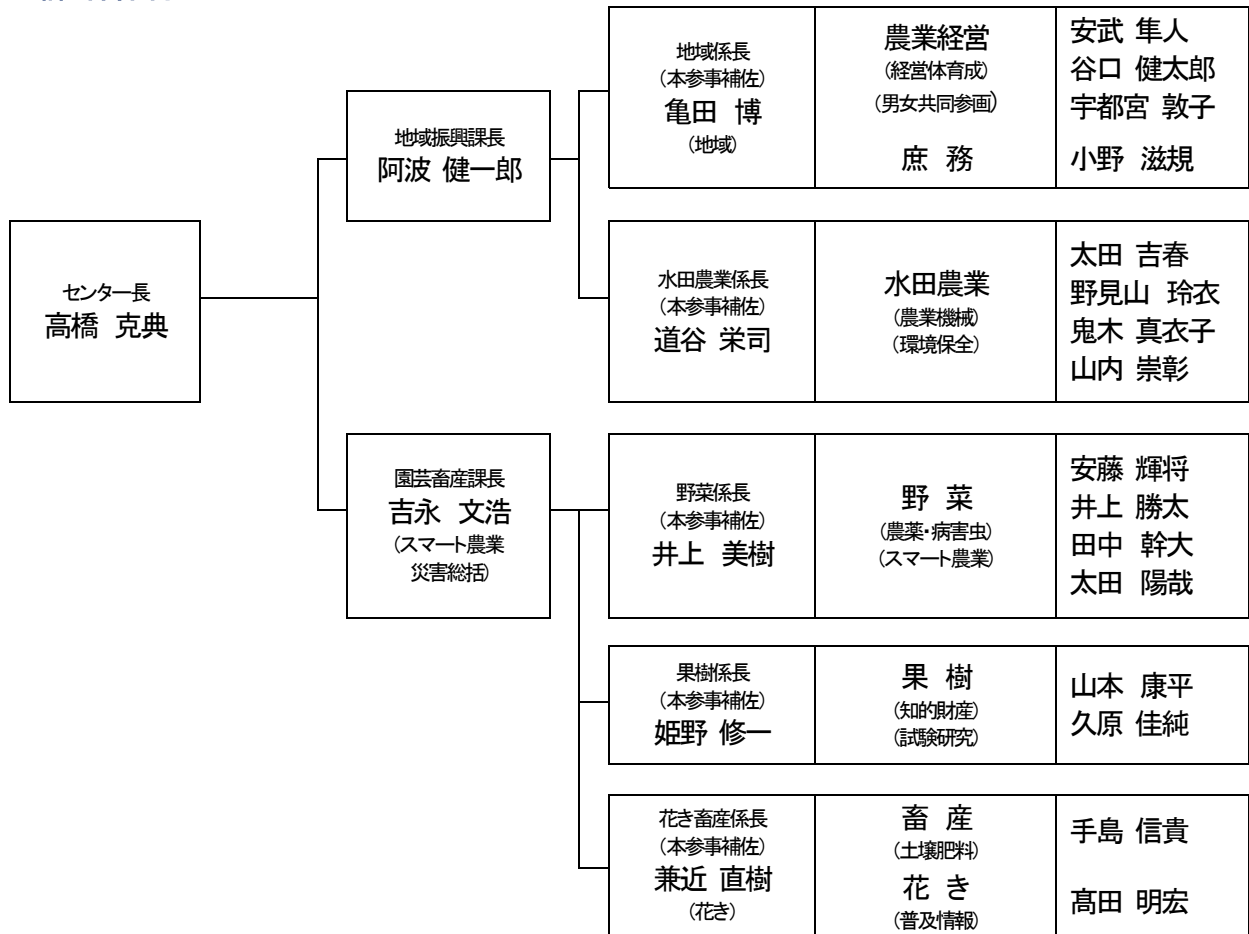
内容は、福岡県ホームページ「令和3年度京築普及指導センター活動情報」から閲覧できます。

<https://www.pref.fukuoka.lg.jp/contents/2keichiku-katudo-joho.html>

6 参考資料

(3) 普及指導センターの活動体制

■課・係体制



■班活動の体制

○プロジェクト班

京築農業人づくり推進班	総括：阿波 推進員：亀田 班員：安武、谷口、宇都宮、道谷、井上美、姫野、兼近
園芸農業育成推進班	総括：吉永 推進員：井上美 班員：宇都宮、安藤、井上勝、田中、姫野、山本、兼近、高田

○センター内運営事項における推進班

担い手育成推進班	総括：阿波 推進員：亀田 班員：谷口、野見山、田中、山本、田中
普及情報推進班	総括：吉永 推進員：兼近 班員：宇都宮、山内、井上勝、久原
経営体育成推進班	総括：阿波 推進員：安武 班員：吉永、亀田、道谷、井上美、姫野、兼近
環境保全・食の安全推進班	総括：吉永 推進員：太田吉 班員：鬼木、安藤、久原

○市町連絡会議等担当班

市町名	課長	地域係	各係・部門
行橋市	阿波	宇都宮	必要に応じ、市町連絡会議等の 会議へ参加
荻田町	吉永	宇都宮	
みやこ町	吉永	安武	
豊前市	吉永	亀田	
吉富町	吉永	谷口	
上毛町	吉永	谷口	
築上町	阿波	亀田	

■普及指導センター職員



山内

安武 井上(勝) 山本 安藤 太田(陽) 手島
 久原 宇都宮 谷口 高田 田中 鬼木 野見山 太田(吉)
 兼近 井上(美) 亀田 阿波 高橋 吉永 道谷 姫野

福岡県行政資料

分類番号 PA	所属コード 4703605
登録年度 03	登録番号 0001



福岡県行橋農林事務所 京築普及指導センター

〒824-0005 福岡県行橋市中央一丁目2番1号

TEL (0930) 23-4215 / FAX (0930) 23-8290

URL <http://www.pref.fukuoka.lg.jp/soshiki/4705401.html>

E-mail keichiku-dlc@pref.fukuoka.lg.jp